

南アルプス市立白根東小学校

前期学校関係者評価書

第1回学校関係者評価委員会

実施日 令和元年8月28日(水)

会場 校長室

参加者 中込 恵子(評議員) 橋本 政男(評議員) 鈴木 圭子(評議員)
若尾 徹也(評議員) 仙洞田 麻美(評議員) 望月 君江(P T A会長)
内藤 光洋(校長) 半田 智徳(教頭) 武笠 理恵(教務主任)

I 学校から提案した内容

- 自己評価結果
- 児童アンケート結果
- 学校評価考察

II 協議された主な内容

学校評価考察をもとに、学校の現状(成果と課題)や取組等について情報を共有・協議し、学校・家庭・地域の連携協力により学校運営の改善を目指す。

<学校評価考察>

はじめに

本校には「ベクトルをそろえる」という学校全体の基本方針がある。それぞれの教職員がいくら一生懸命にがんばったとしても、その向きがバラバラでは「学校」として大きな成果は望めない。それはまた、保護者や地域との関係においても同じことが言える。各自の個性やアプローチの仕方は尊重しつつ、チームとして目指す同じゴールに向かっていきたいと考えている。学校評価はそれを検証する貴重な機会であるにとらえ、そこから見えてくる見つけられる事実としっかり向き合っていく必要がある。

「A」(あてはまる)「B」(どちらかというにあてはまる)を肯定的意見、「C」(どちらかというにあてはまらない)「D」(あてはまらない)を否定的意見にとらえると、自己評価(教職員)はすべての項目について肯定的評価が100%を超えている。また、児童アンケートもすべての項目で80%を超えており、全体的にみておおむね満足できる状態であるといえる。ただ、そこから見えてくる課題を見つけ取組を進めていくことがさらなる高みを目指すためには大変重要なことである。

<自己評価における課題>

- ① No.8「学校がきっかけをつくり、保護者とも連携し、児童の学習習慣が確立するよう努めている」において、A評価が44%・B評価が56%となっていて昨年同様課題と捉えている。No.6

「基礎的・基本的な知識及び技能の確実な習得を目指した指導に努めている」（A 評価 83%）に表れているように基礎基本の指導を徹底したり宿題や自主勉強などに取り組んだりして手ごたえは十分感じているようである。ただ、「学習の習慣化」「連携」となると教師にとってまだまだハードルは高いようである。各家庭の協力を得ながら全教職員が地道に取り組み「きっかけ」づくりをしていくことが大切だと考える。ただ、6年生が実施する学力テストの結果は毎年ほぼ全国平均レベルであり、着実に成果が出つつある。さらに工夫を凝らしながら、子ども達が「わかった」「楽しい」と感じられる授業を増やしていくことが主体的な学習や学習の習慣化に繋がる早道であると考えます。

- ② No.12「保護者・地域との連携・協力を努めている」のB評価が43%と高く、教職員がどのように連携をはかればよいのか悩んでいることがうかがえる。「連携」というと相互に協力し補完し合うというイメージがあり、そこまでは到達できていないと考えているようである。今「開かれた学校」ということがクローズアップされ、保護者や地域の方々との連携を深めていくことは大変重要なことであるが、それぞれの立場や持ち場に応じた身の丈に合った連携を模索する必要がある。担任は保護者や授業や活動に関わる地域の方との連携を進めていくことが大事である。管理職や教務を中心に行われている「安心安全」にかかわる連携は更に強化し他の分野に関しても連携を模索し、学校全体に広げていきたいと考えている。「地域と共に育つ子ども」を合言葉に連携を強化していきたい。

<児童アンケートにおける課題>

- ① 校訓である「やる気」「元気」「根気」「勇気」「思いやり」については、子どもたちが評価するに当たり具体的にイメージしにくいところもあるが、A 評価の高い順に「元気」（77%）「勇気」（67%）「やる気」（67%）「根気」（64%）「思いやり」（64%）となっている。例年傾向は同じであるがやはり「元気」が一番イメージしやすいようである。「この場面では〇〇が必要だね」「〇〇が身についてきたね」など、具体的にイメージしやすいようにしていく必要がある。また教職員や保護者、友達同士の評価を通し自己肯定感を高めていくことも大切なことである。そうすることにより、子ども達がより自身の姿を客観視でき、「五本の木」もイメージしやすくなるのではないだろうか。
- ② No.13「学校での様子を、家の人に話していますか」のA 評価は56%でここ数年同じような割合であり、保護者との情報共有という点から気になるところである。No.14「家の人に、学校からのたよりなどをわたしていますか」のA 評価は80%で、ある程度の情報の共有は行われていると思われるが、家庭内で学校のことを話す機会を意図的に確保したい。自己評価No.8「学校がきっかけをつくり、保護者とも連携し、児童の学習習慣が確立するよう努めている」の関連からも意図的に「きっかけ」づくりを試みていく必要があると感じている。学力テストの生活アンケートでも同じような結果が見られることから、家庭学習の中に「親子の会話」のきっかけづくりを学校が積極的に仕組んでいく必要がある。情報不足による「知らない」ということから様々な不安や心配事が発生しがちである。保護者や地域との連携に心して取り組んでいきたい。

Ⅲ 出された意見

○今回は特に評価項目の中から自己評価 No.8「学習習慣の確立」、No.12「保護者地域との連携協力」、児童アンケート NO.13「学校の様子を家の人に話していますか」に絞り、学校・保護者・地域の連携に関する意見を中心に話し合いを進めた。

- ・家庭学習のわかりやすい具体例を示してくれると、より取り組みやすくなるのではないか。(例示はしているが、更に工夫が必要)
- ・いわゆる学習だけでなく、上履洗いや手伝いなども家庭学習と捉え、柔軟に考えていく必要があるのではないか。
- ・子ども見守り隊などのここ数年の取組の成果で、登校の雰囲気や並んで歩く様子が大変よくなり、あいさつも進んでしてくれるようになった。
- ・母親同士はラインで繋がっていて、学校の情報をよく把握し情報交換をしている。
- ・読み聞かせをして、子どもとの時間を大事にしている。
- ・子どもの話を聞くことも大事だが、親から積極的に話すことも大事。
- ・学校や職場での様子を親子でお互いに話し合い、理解に努めている。
- ・勤務形態が変わり時間に追われる日々の生活ではあるが、子どもと向かい合う時間を少しでも作っていくことが大事ではないか。
- ・携帯やスマホに関する学習をして、便利な点や怖い点などをしっかり子どもたちにわからせる必要がある。(全校対象のもの・5年生対象のものを実施)
- ・わからない時に話せる友達や相談できる先生がいないという子どもが少数ではあるが、いることは大変気になり、細かい気配りをしてほしい。(他の調査とも合わせ、対応中)
- ・朝ごはんを食べて登校している子どもが多く、安心した。

Ⅳ まとめ

「東小愛」という視点を前面に出し、「チーム東小」は日々教育活動を行っている。「東小の子どもたちのため」という思いは、学校も保護者も地域も全く同じである。自己評価も児童アンケートもおおむね満足できる状態ではあるが、「地域の強い思い」「地域の教育力」を大事にし、お互いにコミュニケーションを図りながら連携を図っていくことが、「東小愛」につながっていくと確信している。学校・保護者・地域のベクトルの向を同じくし「徹底」して取り組んでいくことが、一番大事なことである。